

移行対象の有無における母子分離について

— 登園時の様子と親子の関わり方から —

○稲荷ゆうり

(愛媛大学大学院教育学研究科)

問題・目的

現在、養育者が子育ての困難さから不安を高めやすくなる(今井, 2011)。一方で、幼稚園という場は、子どもたちの社会の入り口であるため、子どもは、いつもと違う雰囲気ですべて泣いてしまうことがある(瀬知山; 1972, 松井・松尾; 2015)。そして、入園時には分離不安が起これり、園に馴染むまでの期間には個人差があり(田村, 2012), その分離不安を克服する過程の一つとして移行対象が挙げられる(信田, 2008)。

移行対象とは、乳幼児が特定の対象に特別な愛着を寄せる現象のことであり、母親の代替である(Winnicott1953,1971)。つまり、移行対象を持つことは、不安な気持ちを落ち着かせる働きや、発達課題において対象との分離が重要であるため、分離不安を克服する助けにもなる。そこで入園時からの分離不安を長さで考えた時に、入園時に分離不安の真っ最中である幼児は移行対象を持っていると考えられる。

先行研究では、移行対象についての重要性の研究や、移行対象と分離不安に関する研究は見られるが、入園時からの分離期間の長さの関連については検討されていない。しかし、分離期間が長すぎると不登校に繋がる(萩原・長坂, 2013)。そのため、先述のとおり移行対象と入園時からの分離期間の長さの関連について検討することは重要であると考えた。そこで本研究は、移行対象の有無が入園時の分離期間に与える関連について検討を行う。

仮説

仮説1 移行対象を持っている子どもは、入園時に分離期間が長い傾向にある。仮説2 移行対象を持っている子どもは、分離不安傾向が高い。仮説3 入園時に分離期間がみられる傾向にある子どもほど、分離不安傾向が高い。

方法

2016年6月、A県B幼稚園に在籍する3～6歳の園児133名(男児71名、女児62名、平均月齢55.80ヶ月±10.69)の保護者を対象に質問紙を実施した。質問紙は、移行対象についての質問項目と

改訂版幼児用不安傾向尺度を用いて構成している(信田; 2008, 西澤; 2012)。

結果・考察

移行対象の有無について 「ある」と回答した保護者は全体の64%、「ない」と回答した保護者は全体の36%であった。

改訂版幼児用不安傾向評定尺度 信頼性係数を行うため、Cronbachの α 係数で算出したところ、全般生不安($\alpha=.81$), 社会不安($\alpha=.81$), 分離不安($\alpha=.71$)であった。それぞれの下位尺度の平均を各因子得点とした。

検証1 移行対象の有無と入園時からの分離期間の相違について、 χ^2 検定で比較を行った結果、1%水準($\chi^2(1,N=133)=93.602,p<.01$)で有意な差があり、移行対象のある園児ほど入園時からの分離期間がみられた。しかし分離期間の長さについての仮説は検証されなかった。

検証2 移行対象の有無と不安傾向尺度の平均得点について、 t 検定で比較を行った結果、「分離不安」の平均得点のみ1%水準で有意な差があり($t(133)=2.76,p<.01$), 移行対象を持つ傾向にある園児ほど、「分離不安」の平均得点が高く、仮説は検証された。

検証3 入園時からの分離期間の有無と不安傾向尺度の平均得点について、 t 検定で比較を行った結果、「分離不安」の平均得点のみ、1%水準で有意な差があり($t(133)=2.73,p<.01$), 入園時に分離期間が見られる傾向にある園児ほど、「分離不安」の平均得点が高く、仮説は検証された。

以上の結果から、入園時に分離期間が見られた子どもは、移行対象を持つ傾向や分離不安傾向が高いことが示された。以上筆者は、入園時からの分離期間がある子どもは、母子分離の期間中であるため、母親と離れるのに不安を感じ分離不安傾向が高く、その癒しとして移行対象を持っていると考えた。

今後の課題

量的研究の結果から検討を行うため、養育者たちへ半構造化面接を行い、質的検討を行う予定である。